

# SHOW HHEYシネマルーム

★★★★

## Data

監督：侯孝賢（ホウ・シャオシェン）  
原作：ハン・チーユン、チャン・ア  
イリン『海上花列伝』  
出演：トニー・レオン／羽田美智子  
／ミシェル・リー／カリー  
ナ・ラウ／ジャック・カオ／  
ウェイ・シャホエイ／レベツ  
カ・パン／ファン・シュエン  
／伊能静／シェイ・ミン／ト  
ニー・チャン

## フラワーズ・オブ・シャンハイ

4K デジタルリマスター版  
（海上花 / Flowers of Shanghai）

1998年／台湾・日本合作映画  
配給：オリオフィルムズ／114分

2021（令和3）年7月22日鑑賞

シネ・ヌーヴォ

## 👁️👁️ みどころ

『悲情城市』（89年）を代表作とする台湾の巨匠、ホウ・シャオシェン監督には本作のような異色作も！松竹が共同出資した本作では、トニー・レオン演じる主人公に羽田美智子が絡むが、2019年の東京フィルメックスでの4Kデジタルリマスター版の世界初上映に際して「良い夢をご覧ください」とメッセージした本作は一体何？

次代は清朝末期、舞台は高級遊郭。遊郭での室内シーンばかりを繋ぎ合わせた本作の陰影に満ちた撮影は素晴らしい。長回しのシークエンスも多少退屈だが素晴らしい。しかし、肝心の物語は？

有名スターの共演も、「良い夢」も悪くはないが、やっぱりホウ・シャオシェン監督の真の価値は『悲情城市』のような問題提起にあるのでは？

——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*——\*

### ■□■ホウ・シャオシェン大特集開催！観たかった本作を！■□■

台湾の巨匠、侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督が2020年台湾金馬獎終身成就獎を受賞！そんな「ホウ・シャオシェン監督デビュー40周年記念」として、シネ・ヌーヴォで6月26日から23日の間「ホウ・シャオシェン大特集」が開催された。そのラインナップの中には、前から観たいと思っていた本作があった。しかも、今回は「4K デジタルリマスター版」で劇場初上映だから、こりゃ必見！さあ、その出来は？

### ■□■なぜ遊郭を舞台に？なぜ大スターを？なぜ松竹が出資？■□■

ホウ・シャオシェン監督の代表作は、何と言っても『悲情城市』（89年）（『シネマ17』350頁）。私が同作をはじめ観た時の衝撃は大きかった。それより以前の『冬の夏休み（冬冬的假期）』（84年）（『シネマ44』198頁）、『ナイルの娘（尼羅河女兒）』（87年）（『シネマ44』197頁）のような、ほのぼのとした温かい作品とは全く異質の、「二・

二八事件」に切り込むという、監督生命をかけた同作の問題提起性は素晴らしかった。また、『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン（紅気球之旅）』（07年）『シネマ20』（258頁）も彼流の鋭い問題提起があったし、直近の監督作品たる『黒衣の刺客（聶隱娘刺客）』（15年）も若々しさに満ちた素晴らしいエンタメ作品だった。

ところが、本作は19世紀末の清朝末期の上海のイギリス租界に軒を連ねる高級遊郭を舞台に、そこに入り出る男たちと娼婦たちの関係を描き出したものだ。ホウ・シャオシェン監督は、なぜこの時期（1998年）にそんな映画を作ったの？また、本作は日本の松竹が一部出資して製作されたうえ、当時「チームオクヤマ」女優として活躍していた羽田美智子が主役の1人である沈小紅役で登場している。松竹の共同出資は『憂鬱な樂園（南國再見、南國）』（96年）に続くものだが、それは一体なぜ？さらに、本作は主演のトニー・レオンの他、女優陣にはミシェル・リーやカーリーナ・ラウ等のビッグ・ネームが名を連ねている。ホウ・シャオシェン監督の初期作品では無名の俳優をうまく使っていい効果を生んでいたのに、なぜ本作ではそんな有名スター志向になったの？

本作については、そんないくつかの疑問がある。その答えは如何に？

## ■□■清朝末期における、旦那衆 vs 高級遊郭の遊女の生態は？■□■

去る6月5日に観た『HOKUSAI』（20年）では、町人文化が花開いたと言われている徳川の文化文政時代における遊郭の遊女たちの生態を知ることができた。そこでは、飲食と踊り、そして遊女との色恋沙汰の他、浮世絵という芸術の趣が強調されていた。ところが、本作に見る清朝末期の上海のイギリス租界に軒を連ねた高級遊郭に通う旦那衆の遊びは単純なじゃんけんゲームだから、レベルが低い。

とは言っても、遊郭の経営を成り立たせるには、如何にいい女の子を集めて働かせるかがポイントだが、遊郭という舞台を通した「男と女の営み（色恋沙汰）」は、時代や国が違ってても所詮同じだから、本作では何よりも主人公のワン（王蓮生）（トニー・レオン）と2人の遊女、シャオホン（沈小紅）（羽田美智子）とホエイジャン（張蕙貞）（ウェイ・シャホエイ）を巡る“恋模様”に注目したい。

## ■□■主人公と2人の遊女との三角関係が焦点だが・・・■□■

ワンは上海からやってきた役人（官僚）だが、本作では仕事をしているシーンは全くなし。彼は、旦那衆が集まった宴会で適当にじゃんけん遊びをしているだけだ。しかし、ワンは今、長年親しい関係にあったシャオホンが別の男に心を寄せているという噂を聞いてイライラしているらしい。ワンは、嫉妬心の中からそんな噂を教えてくれたホエイジャンと結婚してしまうが、やがてホエイジャンも不倫していることを知り、ホエイジャンとも別れてしまうことに。本作はそんな“メインストーリー”を、遊郭を舞台にした室内シーンの中で展開していただけたから、ある意味で退屈・・・？

そんな“三角関係”が生まれる中で、ワンと別れたシャオホンは、経済的には恵まれないまま若い恋人と新しい人生を歩もうとしているそうだが、その展開は？他方、ワンの方

も、上海でろくな仕事もしていないのに、生まれ故郷の広東に出世して戻れることになったらいいから、そりゃラッキー。なるほど、なるほど。しかし、そうだからと言って、本作は一体どんな物語になっていくの・・・？

ホウ・シャオシェン監督は、2019年の東京フィルメックスでの4K デジタルリマスター版の世界初上映に際して、「良い夢をご覧ください」というメッセージを寄せているが、さて、これだけのストーリーでホントに良い夢を見ることができるのだろうか？

## ■□■陰影に満ちた撮影に注目！吸っているのはアヘン？■□■

近時の邦画は明るく美しい画面ばかりだが、孤島の灯台における新旧2人の灯台守だけで物語を紡いだ『ライトハウス』（19年）は、モノクロで正方形のスクリーンが“売り”だった。本作はカラーだが、本作の“売り”も、それと同じく陰影に満ちた撮影だ。本作のパンフレットには、「李屏賓（リー・ピン・ピン）撮影による光線設計も、それ自体が芸術品のように素晴らしい」と書かれているが、まさに、本作ではその素晴らしさを堪能したい。

デンマークの女流監督スサンネ・ピアは、あっと驚くようなクローズアップ撮影が特徴。彼女の監督作品である『アフター・ウェディング』（06年）（『シネマ16』63頁）をはじめて観た時は、「デンマークにすごい女性監督を発見！人間描写の深さと独特の映像美は特筆物で、韓国のキム・ギドク監督を知った時と同じような衝撃が走った」と書いた。本作には、そんなクローズアップは登場せず、逆に“長回し撮影”が特徴だが、じゃんけん遊びをメインにした旦那衆の宴会シーンにも、個室におけるワンのイライラシーンやワンとシャオホンたちの痴話喧嘩シーンにも、“長回し撮影”はピッタリ。そのため、私たち観客も、一瞬上海の高級遊郭でそんな宴会に参加している気分に入ることができる。

ちなみに、私が体験した中国式宴会では、おいしい食べ物次から次に運ばれていたが、本作に見る旦那衆は、ワン以外は老人ばかりだから料理の量はそれほどでもない。飲んでいる酒も、アルコール度数が60%以上になる白酒ではなさそう。本作で非常に気になるのは、宴会席ではじゃんけんゲームに忙しいからやっていないものの、個室での飲食シーンになると必ず登場する、長いキセルで何かを吸っているシーン。あれは水タバコ？それともアヘン？その真相は？ちなみに、本作は韓子雲（ハン・チーユン）と張愛玲（チャン・アイリン）の原作『海上花列伝』を映画化したものだが、原作ではそれをどのように表現しているのだろうか？

## ■□■ストーリーの面白さは？問題提起性は？■□■

前述のように、本作はワンと2人の遊女、シャオホンとホエイジャンとの確執がメインストーリー。これは、ワンを専属の旦那としているシャオホンが5年も他の客を取ることがなかったにもかかわらず、ワンがホエイジャンを買ったことによって生じたトラブルだ。遊郭ではそんなことは日常茶飯事のはずだから、私にはなぜそれがトラブルになるのか自体よくわからない。しかし、シャオホンにはシャオホンの言い分があることはスクリーン

を見ているとよくわかる。お坊ちやま育ち(?)のワンがそれに対して頭ごなしに反論できないのは仕方がないが、私に言わせれば、シャオホンの主張には何の正当性もなく、ワンの主張(弁解)が正当だ。金を払って遊郭に来ているワンが、それくらいのこと、シャオホンから文句を言われる筋合いはないはずだ。

他方、本作のサブストーリーは、ツイフォン(黄翠鳳)(ミシェル・リー)にシュアンチュウ(周双珠)(カリーナ・ラウ)がアヘン入りの酒を無理やり飲ませようとするもの。そんな事態になったのかは、こちらも女同士の突っ張り合いによるものだが、このサブストーリーは心中未遂事件に発展していくから面白い。しかも、そこで注目すべきは、ツイフォンがシュアンチュウにアヘンを入れた酒を飲ませて心中を図ろうとするシークエンスだ。しかし、そんなものがホントに飲めるの?本作を観ていると、本物のアヘンを飲むのは、酒に入れても難しいことがよくわかる。

ちなみに、高級遊郭はもちろん“アヘン窟”ではないが、当時の遊郭ではアヘンの使用はどの程度許されていたの?鋭い社会問題提起をするホウ・シャオシェン監督なら、そんな点にも触れてほしかったが、残念ながら、本作にはそんな点への言及はない。もちろん、それはそれで仕方がないが、このサブストーリーも、そうだからと言って一体何なの?本作は、美しい撮影が魅力的な“遊郭モノ”と考えればそれで十分満足できるものだが、私にはどうしてもそんな不満が・・・。

2021(令和3)年7月28日記